
FEELINGS RESTRICTIONS!

蒼螺@ネタよ何処へ...

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F E E L I N G S R E S T R I C T I O N S !

【Nコード】

N 9 9 6 6 T

【作者名】

蒼螺@ネタよ何処へ…

【あらすじ】

ただの感情擬人化コメディー。感情力オス乙！ところで誰の感情？とかそういうのは無しで。

感情渦巻く始まり。(前書き)

オリジナル擬人化小説。

始まり始まり～

「流石『冷静』やなあ。ま、俺としては傷つけあった方が幸せなんやけど」

「…『シャーデンフロイデ』…君は相変わらず質の悪い感情だね。」
「せやから『シャーデンフロイデ』は長いから『シャーデン』って略してええって！」

さらに『冷静』、『シャーデンフロイデ』が軽く加わる。

ただ、加勢はしない。

なぜなら冷静は『冷静』な判断をし、シャーデンは『他人の不幸は蜜の味』をモットー（？）に。

「嫉妬お…貴方はどうせ私が羨ましいんでしょう…？誰でも愛することのできる私に嫉妬してるんだよ！」

「…っ違う！そんな『裏切られたら悲しい感情ランキング』で余裕で一位になりそうなもの、持たなくて良いよ！」

「誰を愛してもとりあえず、あえて嫉妬してしまう貴方は私が羨ましいのよッ！大丈夫！私はそんな貴方でさえも愛せるから！」

「ああーもう、下らないなあ！本当に引くわあ。良い年してそんな喧嘩…大人げないよ。」

「うん、分かってる。良い大人だって分かってる。でもねえ、こいつがあ！???っもう、『軽蔑』！分かてるわよ！貴方はどうせ、軽蔑してるのよね！分かるわあ。貴方の感情だもの！」

「…ムキになるなんて、ますます軽蔑するよ…」

加勢ではないが、新たな火種^{しほり}を踏んだ。
愛はかなり喧嘩腰である。

「い…いい加減に止めて下さいい…怖い…」

「ふえっ?!ああ、ごめんね、『恐怖』！貴女は意外とチキン…ゲ
フンゲフン、ビビりなのよね。」

「チキ…！？？（？A？）」

新たにでて来たのは『恐怖』。

色々な事に恐怖を持つ困った少女。
でも少女だから皆可愛がっている。少女だから。

そんな『愛情』と『嫉妬』と『快楽』と『冷静』と『シャードンフ
ロイデ』と『軽蔑』と『恐怖』とその他大勢の日常コメディー（？
、ここに開幕！！（している。）

感情渦巻く始まり。(後書き)

コーシン頑張るであります。

感情達の紹介（前書き）

ブログの方にいいメ画うつりようと思ったらできなかった…くそっ

さて今回はただの紹介なのでつまらんですよー。

感情達の紹介

FEELINGS RESTRICTIONS！人物（感情）紹介

*愛（情）

性別…女。

性格…めんどろなことを何でも『愛』で誤魔化そうとする。『嫉妬』と『嫌悪』と仲が悪く、しょっちゅう喧嘩する。喧嘩してもなお、愛で誤魔化そうとする面倒な性格。

『恐怖』を可愛がっている。そして恐怖の事は「チキン」と思っている。

『シャーデンフロイデ（以下シャーデン）』は苦手らしい。

基本的には良い人。

嫉妬曰く、『裏切られたら悲しい感情ランキング』で余裕で一位を取れそうな感情。

*嫉妬

性別…女

性格…誰かを愛しても自分にコンプレックスを抱いている故愛した者を何故か嫉妬してしまう、誰からしても困ったちゃん。愛が可愛

らしく前向きな性格の為嫉妬している。つつい喧嘩をする。最近
は快樂も羨ましく思っている。
劣等感と仲が良い。シャーデンが大嫌い。

* 恐怖

性別…（幼）女

性格… 大体の事に怯えてしまう、まさに子供。
皆に可愛がられている。

普段は怖がりで隅っこで小さくなっているようなキャラだが、いざ
出番となれば脅かしたり脅かされたりする。

たまに『恐怖』を感じさせるような笑い方をする。その笑い声を聞
くと、かなり不安になる。

* シャーデンフロイデ

性別… 男

性格… 他人の不幸を喜ぶ、質が悪いが、誰でも抱きやすい感情。ラ
スポス的な存在。

争い事は基本的には傍観。

ドイツから来た一味変わった感情。

恐怖が大好きである。理由では人を不幸に陥れる感情だから、とは
本人の弁である。

『他人の不幸は蜜の味』をモットーに今日も今日とて傍観中。
そして関西弁。

* 冷静

性別…男

性格…冷静。兎に角、冷静。

これといって何もしないので、書くことがない、大変（作者にとって）困った子。

シャーデンとよくいるが、これと言って特に仲が良いわけではない。

* 快楽

性別…男の娘^コ

性格…女装趣味の可愛い子。女々しい。おっとりした口調。

ただ、女装趣味故、変態と言われる。

でも本人はたいして気にしていない。

皆は、変態とは言っても「ブス」とは言わないし、思いもしない。なぜなら可愛いから。

* 安心・不安

性別…女

性格…まず、双子。全く似ていない。

顔は似ていて誰も気づかないほどだが、口を開けば一発でわかる。

・安心…側にいると何故か心が癒される。双子の姉である。

・不安…恐怖と仲が良い、ちよつと恐怖に似た子。双子の妹。

*不思議

性別…男

性格…不思議な子。

因みに、『不思議』とは仏教用語の『不可思議』の略語である。
恐怖に興味を持っている。

感情達の紹介（後書き）

まだ安心・不安と不思議は出てないけど、その内出します。
今回は割と出番の多い感情を紹介しました。
んーでは。

感情制限？何ソレ、美味しいの？（前書き）

一ヶ月振りでございます。

ふざけます。

はい、ネタがありません^q^

ではすたーとー

感情制限？何ソレ、美味しいの？

カオスとは、こんな状況の事を言うのだろう、と冷静は思った。

始まりは、三分前に遡る――

「恐怖ー恐怖ー！あんた、怖いって字書くんだし、怖い話してよ！」
「え……………」

何故ですか？

「間が長いっ！えー、ほら、今暑いじゃない！涼みたいじゃないの！だからよー！」

「はあ…でも、あんまりレパトリーありませんよ？」

「どれくらい？」

「二百はありますでしょうか…」

「充分よ！というか何故そんなに？」

「意味が分かれると怖い話を含むからです」

「ああ、あのどうでもいいやつね…あと都市伝説とか？」

「そうですね。」

「他の感情は怖い話のストックないのかな？」

「…シャーデンフロイデとか、ありそうじゃない？」

「……………」

「え、俺ー？」

「ある？」

「ないよ^^」

「え！話してみて！」

「だから無いって」

「こういう時なんやかんやあるもんでしょ！フィクションでもいいのよ！怖ければいいの」

「いや無い言うとするやろ」

シャーデンは必死で反論する。

愛はそんなシャーデンを無視して問い詰める。

「あるよー絶対あるー！！」

「んー…じゃあ、俺が実際見た話でええか？」

「あるんじゃない！」

「——ほな、話すで。心の準備的なモンはええか？」

「どんと恋よ」

「あのな——」

で、今に至る。

「…何ソレ、フィクション？」

「さっきも言っただ。ノンフィクションや」

「お…恐ろしすぎるー！！」

どんな話かは、御想像にお任せします。

「愛さんが愛以外の感情を持つなんて…」

「ま、まあ所詮人間だもの。」

「どこの相田みつをだよ！」

「…さて、恐怖。貴女の怖い話は…？」

「そんな怖くありませんよ…」

と、恐怖は若干引くように言った。
しかし、顔は恐ろしく笑っていた。

「きひつ…じゃあ、どんな話が良いですか？私は色んなジャンルを知ってますよ…」

「え…じゃあ、非人道的な残虐な話か、非科学的な話を」

「なら非人道的な『コトリバコ』を。」

恐怖のした怖い話をまとめるとすると、下記となる。

『コトリバコ』

簡単に言つと呪いが詰まった小箱のこと。

正しくは『子取り箱』と書くんだそうです。

1860年代後半～80年代前半頃に作られたとされているものだそうです。

部落の人達が部落差別をやめさせるためにある人物から教わった呪物なのだそうです。

それは子供と子供を生める女を苦しみぬく形で取り殺すというえげつない物とのこと。

作り方もとてもあげつないです。

それというのも、箱の中には間引きされた子供の体の一部（指や臍の緒）とはらわたから絞った血を入れるそうで（もちろん、はらわたから血を絞るのだから子供は殺します）

たしかにそんなことすれば呪いも起きそうな気がしますが・・・まあ、実際に起きた話かどうかは定かではありませんけどね。

■「コトリバコ」の作り方

M「それで、その方法がな、最初に複雑に木の組み合わさった木箱をつくること

M「これはちよつとやさつとじゃ木箱を開けられないようにするための細工らしい。

M「これが一番難しい作業らしい。お前らもちよつと見ただろ？あパズルみたいな箱

M「アレを作るんだ。

M「次に、その木箱の中を、雌の畜生の血で満たして、1週間待つ

M「そして、血が乾ききらないうちに蓋をする。

M「次に、中身を作るんだが、これが子取り箱の由来だと思う。

M「想像通りだと思うが。間引いた子供の体の一部を入れるんだ。

M「生まれた直後の子は、臍の緒と人差し指の先、第一間接くらいまでの

M「そして、ハラワタから絞った血を

M「10までの子は、人差し指の先を

M「そして蓋をする。閉じ込めた子供の数、歳の数で箱の名前が変わる

M「一人でイッポウ、二人で二ホウ、三人でサンポウ、四人でシッポウ

M「五人でゴホウ、六人でロツポウ、七人でチツポウ

M「それ以上は絶対にダメだとA Aは念を押したそうだ

M「そして、それぞれの箱に、目印として印をつける。

M「イッポウは、二ホウは■といった具合に。

「…どうでしょう？」

「…恐怖？貴女、子供よね？」

「はい、見た目年齢は子供ですが」

「精神年齢と実年齢は良いから。これ、『女子供は閲覧注意！』って奴じゃないの？」

「まあそうですね。でも私は何度もその手の話を聞いていますから。」

「…もつとある？」

「はい、恐ろしすぎて誰も知らないと言う『牛の首』や、語ってはいけない『鯨島事件』など。あ、語りましょうか？」

「…またの機会に…」

「度胸ないですね。」

()()(恐怖はありすぎなんだよ！！)()()

暑さも飛ぶような恐ろしい話。

皆は恐怖に『恐怖』という感情を覚えた。

もつと怖い話はたくさんあるそう。

次回からは普通にグダグダやられます！

感情制限？何ソレ、美味しいの？（後書き）

今回ふざけながらの怖い話でした^^

どうでしたか？

牛の首とか鯨島事件とか凄い興味ありますw
検索しても出てきませんがw

カオスって冷静が思ったのは、きっと浅い意味があったのではない
でしょうか？↑え

感情達の挑戦（前書き）

こっちが嫌になるわぁ！とか思ってる作者です、ヴェ
突拍子もなく今回もすたーとです

↑

感情達の挑戦

そろそろちよつと真面目な話としては良いのではないかと、いつも不真面目な空気漂うシャーデンフロイデが言った。

「…いや、今更それは…いやまだ4話目だけど…遅い、とは言わないけど、この小説、一応面白くなくても『コメディ』のジャンルだからね?!」

「…次回あたり、どうだ?今回は、さっきの愛のセリフで台無しになったから急に仕切り直すわけにはいかない。」

「次回か…亀更新の作者にとってそれは辛いんじゃない?暫く更新する気ないみたいだし。」

「やる気の問題なんか?やっぱり…俺たちもシリアスやりたいんやけど。」

「今までシリアス小説書いては三日もしないうちに尽く削除してきた作者には無理よ、無理無理。」

「なんとかグロとかホラーはいけるんやけどな」

「ちよつと待つてなんで段々作者の話に「最近PC開けばメールが大量に来てて、よく見たら友達から何通もメール届いてそのメールに粘着質に返信して忙しいもんなあ。」」

「…こんな調子じゃあ、シリアスとか無理じゃん…」

と、冷静が呟いたのは、言うまでもなかった。

今回はやる気の問題で短いよ！
次回！作者はやる気でシリアスにできるのか？！シャーデンフロイ
デはこの話を覚えてるのか？！
乞うご期待！（）してない

感情達の挑戦（後書き）

短い！

次回！また何かします、多分！

感情達、念願の○○○○（前書き）

今回、やつつけです。

どうでもいいや？（＾０＾）？思考で丸投げ。

今度イメ画書いてみますw

え、見たくないって？

それでも書きちゃうから↑

感情達、念願の○○○○

——前回から、状況は一転。

何が何やら分からない空間。

感情達は自由に蠢いている、そんな世界。

だからこそ、成り得る、”感情”たち以外、”誰も”いない、”何も”ない世界。

ここにいるのは感情であるモノだけ。

愛情、嫉妬、シャーデンフロイデ、冷静、恐怖、………

長らくの沈黙、そしてシャーデンフロイデが口を開いた。

「——世界が、常に揺らいでるのは、何の所為かわかるか？」

「…何よ、急に…」

「質問に答えへんのか」

「…私たちの所為、ですよ」

「…恐怖は、わかつとるな。小さいくせに」

「小さい、は余計です」

また、小さな沈黙が一瞬生じた。

「——じゃあ、何が笑顔を齎もたらすか。知つとるか？」

「えつと…私アイ、かしら？」

「…それもあるな。」

「それもあるって…」

「話の大方、掴めてきたんやない？」

そして、今まで黙っていた冷静が口を開いた。

「君のことが、シャーデンフロイデ…」

そう言うと、シャーデンフロイデは静かに笑った。

「…どういう事？何で、あんなんかが笑顔を齎すわけ？」
「わからんか？」

「…どうせ、悲しむ人がいて、それを見て笑う人がいる。———そういう意味でしょ。」

「流石、冷静は察しが良い。」

「そ…そんなの！純粋な笑顔じゃないじゃない！」

「じゃあなんて言うたらええかなあ、ほくそ笑んでいようと、笑顔には変わりないで」

「むうう…！」

「まあそう怒るな。正論やないの？」

「…私的に、あんたは良い感情だとは思わない！」

「分からへんか。」

———「世界を狂わす最初と最後の感情」。

それが、全てを生み出す”始まり”となっ たんや」

「……………！」

「…気付いたか？」

「…それは、つまり私———」

「…そうや」

愛は、初めて自分に嫌悪を抱いた。

「——っていつの考えたんやけど、どう思う？」
と、片手に小さな文字がつまった紙を持ちながらシャーデンがその
場にいる者に言った。

「…って脚本才ちかいいいいいいいい！！！！！！」

また、今日もツッコミが響くのであった。

感情達、念願の○○○○（後書き）

なんちゃってシリアス。
すいません！

感情による特殊能力（前書き）

お久で更新です

友達に書いて頂いた漫画より軽くネタを頂いた。

もとより特殊能力は無い設定だったけど、特殊能力（？）使ってたから…
すたあと

感情による特殊能力

ため息を、吐く。

相変わらずだな、と。

冷静は嘲笑した。

「だから、俺は特殊能力があつたらええと思うんよ」

という、またシャーデンフロイデの突拍子もない発言の所為だった。愛情は反論するように言う。

「特殊能力って…あんたねえ、そんなモンどこで使うの？ 私たちは感情よ、感情に何が必要だっていうの？」

「外部から敵が攻めてきたーっ！ ってあらへんか？」

「ないわね、全っ然無い。時々ニンゲンは迷い込んでくるけど…」

「その時にや。悪しき心を持つヤツが攻めてきたらどないするん？ 打っ手がないやろ」

「せやけど…って間違えた、そうだけど…特殊能力って言ってもね。もう一回言っわ、私たちは感情よ。お解かり？ それぞれの感情を活かすしかないの。例えば、私が悪しき心を持つ能力でもあつたら、キアラ崩壊どころじゃないわよ」

「なりチャで『B L H A H A』とか言ってるようなものですね」

「恐怖…急に入ってきて、何作者の実体験を言ってるのよ」

「だから、いいじゃないですか？ 特殊能力。」

「おー恐怖は分かってくれるんやな。流星や、ええ子ええ子」

「何よ…私が頑固みたいに」

「つまり、ですよ。愛さんが誰かの為に、誰かに愛情を持たせたり、フラグを立てたり。」

「…あ、」

と、ここまでの会話を聞いて。

冷静は、流石今迄通り。

「できる筈がない」

と、考えていた。

まず、話の趣旨が変わっている事に気づいていない。

最初、シャーデンフロイデは確かに『悪しき心を持つヤツが攻めてきたらどないするん？打つ手がないやろ』と言った。

そこに、愛情という特殊能力は必要だろうか。

それに気付きながらも、面白かったのであえて言わなかった。

そして、

「——あれ？」

と、愛情。

気付いたらしい。

「——だよ、ね？」

と上記の説明。

「「あ。」」

シャーデンフロイデと恐怖は、間の抜けた声を出した。

「…いや、でもな、かつこええやん！特殊能力！」

「そうですね！最近の少年漫画でも、特殊能力を使ってどっきやんばっきやんやってますし！ああいう漫画、人気でしょう？某マフィア系漫画とか、某ゴムゴム漫画とか、某死神系高校生漫画とか！」

「雑誌に限られてるけど…てか、人気出したいの？」

「え…違いますが」

「はいシャーデン！あんだ、最初なんで特殊能力が欲しいと思ったの！？」

「え…だって、かつこええやん」

やっぱり、特殊能力はいらないと考える一同だった。

感情による特殊能力（後書き）

グダグダ：そもそも、最初から設定ないから特殊能力とかむりだね！
シリアス書きたいお

では次回！

感情だって事情がある（前書き）

愚痴ろう。

タイトルのネタがない。

適当とか適当とか適当になる

内容もネタがないんだがまあ気にしない

… 本編いつきまーす！

感情だって事情がある

異変を感じた。

何かは分からない、ただ、なんとなく変な感じがする。
何か足りないような。

それを最初に感知したのはいつもの如く冷静だった。

他の者が騒ぐ中一人静かに眺めていた冷静だからこそ気付いたのだと思う。

「何か、おかしい。」

その言葉を聞いた嫉妬は

「…冷静が、いつも喋ってないのになんか目立ってる事が？」
と常々気に入らなかったことを言った。

「違う、何か足りない。」

それを聞いたシャーデンフロイデは

「冷静のボケ量が？」

「そんなの最初から無い。」

と変に返され。

「あ、冷静さんのお昼ごはんですか？それなら、シャーデンフロイデさんがつまみ食いしてましたよ。」

「それでもない。ていうか何してんのさシャーデンフロイデ。」

「食欲に義理は勝てへんかったわ」

「何、皆して僕の事いじめてるの？」

いや、そうじゃなくて……」

そう幾つかボケ& amp; ツツコミを繰り返し、本題に入る。

「…愛が、いないよね」

「……………」

何かに気付いたように、シャーデンフロイデは言った。

「ああ、愛なら昨日外に出たつきり戻ってきてないで」

皆は、やっと愛がないことに一日越しに気付いた。

「そ、それは…部屋に行ったら、『探さないで下さい』っていう書置きがあるのでは…!？」

「愛が、家出なんてしそうにもない。事件の臭い…」

嫉妬は何か不吉そうに言った。

「とりあえず、外に出て探してみるか？」

「案外公園に座り込んでたりな」

「それは流石に…ある、かな？」

「善は急げです！行きますよ！」

と、何故か恐怖が仕切る形となって愛を探しに公園へと向かった。その中、冷静は「…公園にいるってことで決まったの？」と呟いたのだった。

（公園）

「…やつぱり、いませんかね？」

「ホームレスみたいな兄ちゃんしかおらんわ。」

「それはそれで心配だけど今はそれどころじゃない。次は…」

公園は愛がいそうになかったので、とりあえず周辺を一周してみることにした。

「シャーデンフロイデ。」

「なんや？冷静」

「昨日、愛が出て行った時に、どこに行くって言うてた？」

「行き先は行ってへんかったわ。『自分探しに行く』っていったっ

た気がするで」

「何か果ての無い旅に行こうとしてない!？」

「果てはな、何にでもあるんやで」

「今はそれどころじゃない。兎に角、他にいそうなところは？」

「…神社のお隣の、佐藤さんの家とかはどうでしょう…佐藤さん、愛さんを良くしてくれましたし。」

「せやな、行ってみるか」

と、愛探索隊は（それなりに）本格化していた。

「神社のお隣の佐藤さん宅」

「佐藤さん」

と、家のベルを鳴らした。

「はい」

そうやって出てきたのは、見慣れた呑気な小娘だった。

「…愛!」

そう呼んでも、目の前の小娘は何も答えなかった。

感情だって事情がある（後書き）

微シリアス入りまーす。

一応愛のビジュアル語ろう、知らない人もいるだろうし。

アホ毛の生えた金髪のおさげ。ピンクのチャイナ服を着ている。ただし中国とは関係ない。た

簡単に説明するところなる。
では次回に続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9966t/>

FEELINGS RESTRICTIONS!

2011年11月20日23時27分発行